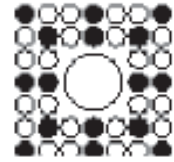


Newsletter of the British Council Japan Association

BCJA Newsletter



No.31

April, 2015

● お知らせ ●

奨学基金への寄付を募ります

BCJA 奨学基金は、BCJA 会員の有志の方々からの寄付金を基盤として、英国留学生の支援活動を着実に進めてきております。今年度も奨学生の募集を行いますので、奨学基金へのご寄付をお願い申し上げます。

(詳しくは、本ニューズレター12 ページをご覧ください。)

募金計画

- ◆ 寄付金額: 一口 5,000 円
- ◆ 口座番号: 00180-0-426794 (ゆうちょ銀行)
- ◆ 加入者名: BCJA 奨学基金
同封の振込用紙をご利用くださいませ。

年会費の納入をお願いします

BCJA 運営のため、年会費の納入をお願いいたします。

納入方法

- ◆ 年会費金額: 2,000 円
- ◆ 口座番号: 00180-0-426794 (ゆうちょ銀行)
- ◆ 加入者名: BCJA 奨学基金
同封の振込用紙をご利用くださいませ。

BCJA 役員および執行部を募集いたします!

BCJA の運営のためにご協力いただける方を随時募集しております。Google グループなどで活動も行ってまいりますので、是非ご連絡ください。

ご連絡先

- ◆ Google グループ URL
<https://groups.google.com/forum/?hl=ja#!forum/bcja-member>
- ◆ メールの方は: ishiikayoko@hotmail.com

2014 年 BCJA 年次総会について



BCJA 会長 青柳昌宏

2014 年の BCJA 総会については、昨年引き続きまして西田先生のご厚意により根津美術館の講堂を使わせていただき、2014 年 11 月 15 日(土)に開催させていただくことができました。なお、総会の後に、開催中の展覧会「誰が袖図-描かれたきもの-」、貴重なコレクション(2 階の青銅器、茶道具、うつわ)を鑑賞させていただくことができました。また、懇親会は、場所を変えて開催させていただきました。以下が議事の内容になります。

◆BCJA 総会 (14:00-14:30)

(1) 会長報告と審議

14 年目を迎えた BCJA 奨学金は、例年レベルの応募数があり、優秀な奨学生 6 名を英国留学に送り出しました。一方、年々減少する会員数により、奨学金への寄付総額は、減少傾向にあります。奨学金の運営を維持するためには、BCJA 奨学生に対する会員登録への勧誘および役員会への参加勧誘などを検討する必要があります。奨学生独自の OB 組織について、検討状況にある。これらの課題について、議論を行った。

(2) BCJA 奨学金報告: ニューズレター 31 号参照

(3) 会計報告と承認: ニューズレター 31 号参照

(4) ニューズレター・ホームページ報告: ニューズレター 31 号参照

(5) 新役員および新執行部の選出

会長: 青柳昌宏

会計: 島津幸男

講演会および AGM 担当: 西田宏子、山口晶子

ニューズレター担当: 石井加代子

BCJA スカラー担当: 斉木臣二

役員：白鳥令、青柳昌宏、平正臣、池島大策、出来尾格
(敬称略)
の方々が承認されました。

◆BCJA 奨学生 OB 近況報告 (14:30-16:15)

近況報告の詳細については、次節をご覧ください。

- (1) 出来尾格氏「人の皮膚に住み着く微生物に関するイングランド公衆衛生局とノッティンガム・トレント大学での研究活動」
- (2) 斉木臣二氏「神経変性疾患の治療法に関するケンブリッジ大学での研究活動」
- (3) 小野寺麻希子氏「日本の東南アジア外交に関するワーウイク大学博士課程での研究活動」

◆展覧会見学 (16:15-17:00)

◆懇親会 (17:00-)

(総会についてのお問い合わせは、
masa_aoyagi5@yahoo.co.jp までお願いいたします。)

BCJA 奨学生 OB 近況報告

上記の BCJA 総会(2014 年 11 月 15 日開催)にて、BCJA 奨学生 OB3 名の方より近況報告をいただきました。その内容についてご紹介いたします。

(1) 出来尾格氏 (東京女子医科大学講師)

昨年 11 月の BCJA 総会にて、留学報告を行った。この留学は、小生が 2012 年 9 月からの 1 年間イングランド中部のノッティンガム・トレント大学 (NTU) 理工学研究科修士課程に在籍したものである。小生は皮膚科医としてのキャリアの一環として、2002 年から皮膚表面に生息する細菌の研究をしている。2010 年から英国で研究員として滞在する機会を得て、その延長として NTU に在籍して生命情報科学を学ぶことを通じて細菌の挙動の解析を行った。情報科学の講義、プログラミング実習、日本から持参した細菌株を用いた研究の実施、修士論文の作成、ポスター発表などの過程を経て、研究修士号 (Master of Research) を優秀卒業 (with Distinction) にて取得した。同じ英国での研究活動ではあったが、研究員としての活動より大学院生としての活動の方がより国際的で、楽しく、また糧となる要素が大きかったように思う。また、勉学を通じて多国籍の友人を作れたことも大きな収穫であった。奨学金を通じてこのような貴重な機会を与えてくださった BCJA に深謝したい。

(2) 斉木臣二氏 (順天堂大学准教授)

2005 年 BCJA 奨学生の斉木臣二です。私は 2005-8 年まで英国 Cambridge 大学 (Cambridge Institute for Medical Research、以下 CIMR) に留学し、神経変性疾患 (アルツハイ

マー型認知症、パーキンソン病などの加齢とともに発症率が增加する中枢神経細胞の進行性脱落に起因する諸疾患) の新規治療薬開発に関する研究を行いました。2008 年 4 月より現所属施設 (順天堂大学脳神経内科) に就職し、現在も神経内科医としての臨床業務および研究を継続しています。

以前留学報告で述べたことは省き、私にとっての CIMR 留学がどのように現在の carrier に結びついているかを述べたいと思います。CIMR のボス Prof. David Rubinsztein は私が留学して 2 ヶ月後に permanent Professor のポジションを得、徐々に大きな研究業績を挙げ、仕事が軌道に乗り始めた頃で、そのため博士研究員それぞれが自らのアイデアを試し、結実する時間的・経済的余裕を与えることができた時期でした。そんな環境の下、私自身自由な発想で思う存分研究を行うことが出来たのは非常に幸運であったと感じています。彼からは、科学的思考・実験の解釈の厳密さを学んだこと、さらに公的研究費獲得の strategy、厳しさを学んだことが帰国後の私にとって大きな力となり、帰国後に十分な研究費を得られない状況でも状況を打開する強い意志を持ち続け、チャレンジを続けることが出来ました。帰国直後の 2008 年度は民間財団からの 300 万円/年の研究費で全てを賄いましたが、留学中の仕事がインパクトのある雑誌に掲載されたこともあり、2014 年度には文科省科研費のみで 2000 万円/年となりました。向上心ある部下にも恵まれ、ある程度独創的な仕事を完成させる目処も立ちつつあります。

帰国後、今後の BCJA の活動を盛り上げるべく、BCJA 奨学生を含む 20 歳代~40 歳代の英国留学経験者で定期的に集まる会を東京で開いています。私にとって Cambridge への留学は思考の礎であり、今後も意欲ある若い方々に英国への留学をして頂きたいと切望していますので、どのようにバックアップできるかを真剣に考えていきたいと思っています。

改めて、私の英国留学を支えて頂いた BCJA の方々に厚く御礼申し上げます。

(3) 小野寺麻希子氏 (外務省通常兵器室)

仕事と博士課程との両立

私は、イギリスの Warwick 大学国際関係学科で博士課程に所属し、政治学の博士を取得しました。仕事を続けながら博士を取得したいと思い、興味のあるテーマを研究している大学教授をウェブサイトで見つけ、状況を説明の上、研究計画書を送付してみたところ、最終的に、イギリスに長期に滞在できなくても、パートタイム PhD としての入学が認められました。入学後は、仕事と博士課程での勉強の両立は想像していたとおり大変で、結局、博士の取得には合計 7 年もかかりました。そんな状況でも、私の指導教授は、かなり柔軟に対応してくださり、年に 3 回ほど大学を訪問した際に集中的指導を受け、また、スカイプを使って、数ヶ月に一度、一時間ほど指導を受けることができ、指導教授とのコミュニケーションにおいては、不便を感じたことはなかったです。また、大学を訪問した際には、同じ博士課程の学生と交流したり、

大学のキャンパス内で行われた合宿形式の学会にも参加したり、学生生活を楽しむことができました。イギリスは、伝統を重んじる保守的なイメージが強いですが、他方、柔軟な形態にて博士課程で研究できるといった多様なチャンスが開かれている先進性もある素晴らしい国で、そのような国で勉強できよかったです。



写真1:カンボジアで行われた武器貿易条約のワークショップに参加

2014 年度BCJA英国留学奨学金の審査を終えて

——募金へのご協力に対する感謝とお願い

BCJA 英国留学奨学金審査委員会 委員長 白鳥 令

2014 年度も、6 名の優秀な方々(内 1 名は授与決定通知後に辞退)に英国の学術研究機関への留学のための奨学金を授与することが出来ました。本奨学金は、BCJA 会員を中心とする多くの方々からの寄付により可能となっています。本年も、暖かい寄付をいただいた方々に心からお礼を申し上げますと共に、今後ともこの BCJA 英国留学奨学金制度にご支援とご指導を賜りますよう、心からお願い申し上げます。

日本がこれほど豊かになっているのに、また英国留学の機会がこれほど多くあるのに、今さら英国留学のための奨学金を(それも少額の奨学金授与の制度を)運営する必要があるだろうかとの議論がある所で交わされました。確かに、海外留学のための資金は様々な形で提供されて居ます。しかし、英国留学に特化した奨学金はありませんし、大学・大学院や官庁に所属していない有為な人材が英国留学をしようとする場合に利用できる奨学金も 多くはありません。大学・大学院に所属している研究者を考えると、博士号を取得した多くの研究者が オーバードクターとして短期任用の不正規な職場に勤めているのが、日本の現状なのです。BCJA 英国留学奨学金の金額は少額ですが、この奨学金の

質の高さは英国でよく知られており、British Council 代表によるBCJA 奨学金授与証明書の効果もあって、BCJA 奨学金は少額ですが、BCJA 奨学金の授与者の価値を認めて、他の奨学金機関が奨学金を出しているケースが増えています。

2014 年度の BCJA 英国留学奨学金への応募者は 56 名、大学院在籍中か、すでに確立した若手研究者、それに、大学学部卒で職場での経験を複数年有している応募者がほとんどで、学部レベルの応募者はほとんど 有りませんでした。応募者の分野は今回も広範で、医学、物理、農学から、英語教育、開発経済、法学、音響科学、スポーツ心理まで、実にさまざまな分野にわたっていました。本年の新しい傾向としては理工系の 応募者が増加したことで、この傾向が審査結果にも反映されています。開発途上国の援助に携わっている 人々で、その経験を基礎に、公衆衛生や開発理論など専門的な勉強を英国の大学院で学びたいとの 応募者は、今回も多数存在しました。

2014 年度奨学金授与者リスト

名前	留学先 研究機関	研究分野	所属/出身校
森田 亘 (決定後に 辞退の申し 出)	Nuffield Department of Orthopaedics, Rheumatology and Musculoskeletal Sciences, Univeristy of Oxford	筋骨格科 学	筑波大学、 University College, London
濱田 将太	King's College, London	疫学	広島大学、 京都大学大 学院
篠原 肇	Cavendish Laboratory, University of Cambridge	物性物理・ 化学	慶応大学、 慶応大学大 学院
川野 裕介	University College, London	コンピュ ータ科学	横浜国立大 学、大分県 庁
当麻 さくら	West Dean College	書物、図 書館資料 の保存・修 復	京都精華大 学、神戸松 蔭女子学院 大学図書館
重本 祐樹	Institute for Manufacturing, University of Cambridge	デザイ ン マネー ジメ ント	立命館大 学、 University of Oxford

本年度 BCJA 英国留学奨学金を授与された方々の中で今回審査委員会が目にしたのは、大分県庁で 行政事務処理のソフト開発をされている川野祐介氏と、神戸松蔭女子学院大学の図書館で書物の 保存・修復をされている当麻さくらさんでした。それぞれの職場の実務を改善するために、その分野で 伝統を有する英国の大学に留学を希望された

方々です。BCJA英国留学奨学金は、これ迄、学問 分野に関係なく、レベルの高い研究者に数多く授与されて来ました。今後は、書物の修復や行政事務 改善ソフト開発の様な、実務家の英国留学にも支援の手を伸ばすことになるでしょう。

最後に、再度、皆様のBCJA英国留学奨学金制度へのご理解とご支援をお願い申し上げます。BCJA英国留学奨学金の授与者は、帰国後日本の発展に貢献するだけでなく、長い歴史を持つ日本と英国の友好関係の維持・進展にも大きな役割を果たすと私は信じています。

BCJA英国留学奨学金の寄付の方法

- ◆ 寄付金額： 一口 5,000 円
- ◆ 口座番号： 00180-0-426794 (ゆうちょ銀行)
- ◆ 加入者名： BCJA 奨学基金

2012年度BCJA英国留学奨学金授与者からの近況報告

実施報告書

阿部正太郎

1. はじめに

BCJAより奨学金のご支援をいただき、2012年秋よりスコットランドの University of Glasgow, School of Social and Political Sciences に留学し、現地で未利用地問題について学んできました。本稿では、その実施報告をさせていただきます。

2. 研修の目的と滞在先

今回の研修では、研修先の機関においては、スコットランドに顕在化している土地利用上の問題について学び、現地での資料収集やデータ整備を通して現況を把握することで、日本が直面している土地利用問題との差異について知見を得ることを目的としました。研修先としてお世話になったグラスゴー大学は、その名のとおりに、スコットランドのグラスゴーにある大学です。スコットランドの中で最大の人口を誇るグラスゴーですが、その数は 600,000 人ほどで、日本の中核市程度の規模です。また、市の面積は 180m² ほどで、同国内の西部に位置しています。

グラスゴー大学には古い校舎が多く、その雰囲気はまるで某魔法学校そのままでした。大学の近くには広大な敷地を有する公園があり、夏にもなると、授業の合間か授業中かはわかりませんが、多くの学生で賑わうようです。また、英国の大学が日本の大学と異なっている点として、日本の大学は、敷地境界を壁で区切るなど、大学の敷地がきっちりと決まっている所が多い印象ですが、グラスゴー大学は、まちと大学との境界が曖昧で、まちを形成する建物群の1つとして位置

づけられている印象がありました。



写真1:グラスゴー大学

3. 研修成果等

現地での研修では、指導教員との週に1度のミーティングをはじめ、大学の講義への参加だけではなく、現地調査を通して、グラスゴーにおける土地利用問題について学ぶことができました。古くから工業都市であったグラスゴーは、スコットランドで最も人口の多い都市である反面、工業の衰退を期に、半世紀の間に人口が半分程度に減少し、このような工業の衰退と人口の減少に伴い、市内の様々な地域で未利用の土地、管理上見捨てられた土地が増加しており、グラスゴーの土地利用を考える上で大きな問題となっています。



写真2:グラスゴーの未利用地

今回の研修では、スコットランドの各都市の DataZone と呼ばれる、日本の町丁目相当の未利用地に関するデータを構築し、そのデータを用いて、グラスゴーにおける未利用地の増加傾向を把握しました。その結果、他の市においては、未利用地が全土地に占める割合は 3-4%であることと比較して、グラスゴーでは 8%と、スコットランドの中で最も多くの未利用地が存在していることを明らかにしました。その上で未利用地の増加要因について、現在も研究を続けております。

また、上記のような個人研究だけではなく、”Changing

Cities & Neighbourhoods”や、”Real Estate Markets”、”Spatial Planning Strategies”などの授業を通して、英国の土地開発について学ぶことができました。

4. 現地での生活

グラスゴーは日本の北海道よりも緯度が高いのですが、今回、滞在した時期が冬であったにもかかわらず、現地の気候は、日本と比べて比較的温暖で、雪はほとんど降りません。しかし一方で、天気はほとんどが雨で、研究をする上では、ある意味、申し分のない環境であったといえます。また、冬は日の出から日没までの時間が非常に短く、暗闇の中、学校に登校する姿は日本ではまずお目にかかれぬ光景といえるかも知れません。

スコットランドでの滞在前から最も気になっていたことの1つは、現地の食事情です。その理由としては、まず良い噂を日本で聞くことがなかったことが挙げられます。しかし、そのような話を語る人の情報が古かったのか、現地での食事は大変おいしいものが多く、あれは失敗だったと思えるものが特に思い当たりません(あくまでも著者の体験談です)。また、スコットランドの物価は日本に比べて安く、海が近く、広大な農地をもっている環境からか、近くのスーパーはどこも食材が豊富で、自炊もよくなりました。さらに、近年では、欧州国を中心に日本食がはやっているのか、日本食のレストランも多数みられました。ただ、日本食とは言っても、日本食の欧風アレンジメニューが中心だったので、その味はモダンジャパニーズといったところでしょうか。

5. 最後に

今回の研修中は、研修先であるグラスゴー大学だけではなく、その他の欧州都市もいくつか訪問することができ、都市計画を専攻する私にとって、すばらしい経験となりました。今後も、国内外を問わず、世界の都市において顕在化している問題に着目し、1つでも多くの都市問題の改善に貢献できればと思っています。また、今回、BCJAにご支援いただいたことに、深甚の感謝の意を表します。

(2012年度 BCJA 奨学生, University of Glasgow, Urban Planning (Land Use))

2013年度 BCJA 英国留学奨学金授与者からの近況報告

BCJA 留学レポート: ロンドンでの研究と生活

大竹 裕子

BCJA より奨学金を頂き、2013年春より英国の London School of Hygiene & Tropical Medicine (LSHTM: ロンドン大学衛生熱帯医学大学院) 博士課程に留学をさせて頂いております。LSHTM に来る前は独立行政法人日本国際支援機構 JICA の海外青年協力隊員として2年間ルワンダで活動し

ておりました。このときの経験を元に、博士課程では「メンタルヘルス・ケアと女性に対する暴力予防を目的とした地域介入の統合: ルワンダにおけるニーズと障壁」というテーマで研究を行っております。(※本研究における女性に対する暴力とは、夫婦間・パートナー間の身体的・性的暴力、及びパートナー以外からの性的暴力として定義しています。)

1. 研究内容

女性に対する暴力とメンタルヘルスの関係: 近年、女性に対する暴力とメンタルヘルスとの関連が指摘され始めています。女性の場合では、暴力被害を受けることで抑うつ、不安、PTSD (Post traumatic stress disorder: 心的外傷後ストレス障害) といった症状が引き起こされること、また逆にこうした症状をもつ女性は暴力被害にあいやすいことが示されてきました。いくつかの観察的研究(コホート研究)によれば、暴力被害女性の約50%が数年以内に抑うつや不安障害、PTSDの症状を示し、また逆に、抑うつや不安障害、PTSDを抱える女性の約30%が数年後に暴力被害にあっていました。この双方向的な因果関係は女性の暴力被害とメンタルヘルス悪化との悪循環を生み出すとても重大な問題です。一方男性の場合では、幼少期の虐待や紛争、兵役によりトラウマを抱える男性が飲酒などを介して暴力をふるいやすくなることを示す研究等があります。以上から本研究では、従来、別々に扱われる傾向にあったメンタルヘルス・ケアと暴力予防の介入プログラムとを統合することを提案します。二つの介入プログラムを統合することでこの悪循環を断ち切ることができるのではないかと、という考えです。

ルワンダの現状: 本研究は特に紛争影響地域におけるメンタルヘルスと暴力の問題に焦点を当てています。具体的には、アフリカ中央部に位置するルワンダという国におけるメンタルヘルス・ケアと女性に対する暴力予防の二つの介入をいかに統合することができるかを探索的に研究するものです。ルワンダは1994年に民族の違いに由来するジェノサイド(大虐殺)を、またその前後にも紛争を経験している国です。ルワンダにおけるメンタルヘルスと女性に対する暴力との関連を調査した研究は少ないものの、ジェノサイドを経験した男性はそうでない男性に比べ女性に暴力をふるう傾向が高いことを示す調査結果や、ジェノサイド寡婦が地域社会の中で暴力にあいやすいといったことが経験的に知られていません。

ルワンダのメンタルヘルス・ケア: ルワンダでは1994年のジェノサイド以降、メンタルヘルス・ケアを目的とした様々な地域介入プログラムが開発、実施されてきました。例えば、ルワンダ保健省と和解委員会は寡婦に対するカウンセリングの提供や虐殺被害者と加害者の和解のための取り組みを行ってきています。また市民団体や国際 NGO もメンタルヘルス・ケアと和解のための地域介入プログラムを実施してきました。地域における介入プログラムとして最も多いスタイルは、村落ごとに15~20名程度の参加者からなるグループを複数形成し、トレーニングを受けたルワンダ人ファシリテーターが

グループ・ワークやグループ・ヒーリングを行っていくというものです。ファシリテーターはグループ内の相互理解や相互扶助が高まるように働きかけます。グループの中では様々な問題が話し合われます。住民が助け合うことで実際の行動や地域変革が起きることも多く、ジェノサイドに関する異なった歴史をもつ人々が協働して被害者のための住居を建て始めたり、小規模ビジネスを始めたりすることもあります。こうした取り組みを通じて人々のウェル・ビーイングが向上し、生きやすい環境が整うことで、抑うつや不安障害、PTSDといった症状が軽減されるのかもしれませんが。

ルワンダにおける暴力予防の取り組み:一方、ルワンダにおける女性に対する暴力予防の取り組みは比較的新しいものです。2008年のジェンダー暴力防止法の制定以降、ジェンダー家族省や市民団体、国際NGOによる地域介入プログラムが実施されるようになりました。暴力予防の地域介入もメンタルヘルス・ケア同様、グループ・ワークによって行われることが多いです。異なるのは、ジェンダー規範やパートナー間のコミュニケーション、紛争解決方法などに重点が置かれることです。

ルワンダのもつ社会的コンテキストの中での統合:上記のように、ルワンダにおけるメンタルヘルス・ケアと女性に対する暴力予防は共通する点もあるものの、それぞれ異なる起源と目的をもち、地域介入プログラムの内容も、関わるステークホルダー(省庁やNGO等の関係団体)も、プロジェクト予算の流れや出資団体も異なります。このように二つの異なる流れをもったプロジェクトどうしを統合しようとした場合、どのようなニーズと障壁が発生しうるのでしょうか。ルワンダの人々はメンタルヘルス・ケアと暴力予防の地域介入を統合することについてどう思うのか、どのようなニーズがあるのか、また統合を妨げる要因は何か、といったことを明らかにすることが本研究の目的です。

さらにルワンダのもつ特殊な社会的・政治的コンテキストを考えることも非常に重要です。なぜなら、地域により受益者の民族的背景やジェノサイドの体験が異なったり、政府系か民間かにより政治的立場が微妙に異なっていたりし、そのこと自体が障壁につながる可能性が高いためです。

研究計画:研究の目的は、ルワンダにおける女性に対する暴力予防及び心のケアを目的とした地域介入プログラムについてのニーズと障壁を明らかにすることです。そのために、①国際的な統合の取り組みを系統的にレビューした後、②メンタルヘルス・ケア及び暴力要望に効果的なプログラム内容を検討し、③実際にルワンダでフィールド調査を行って、ステークホルダー(地域介入プログラムの実施機関)が統合をどのように受け止めるか、ニーズと障壁について探索的に研究します。研究①は既に終了し、現在は研究②を進行中です。

2. 生活一般・余暇の過ごし方

ロンドンの生活で日本と最も違うことの一つに、学生の居住形態があります。学生寮、個人宅の一室を間借り、フラット

シェアといった選択肢が一般的です。私はこれまで学生寮やフラットシェアに住みましたが、様々な国の人々と仲良くなれるという点で有意義だと感じています。育った文化や環境の異なる人々と一緒に暮らすことで思わぬ価値観の違いを発見することもあります。面白かった経験としては、お味噌汁やごま油などアジア圏で育った人にとっては「良い匂い」であるものが、他の文化圏の人にとってはそうではないことがあると知ったことです。異文化というのは自分にとってあまりにもあたりまえすぎて気づかないようなところにあるものだと実感しました。

また、昨年の夏はイギリス人ご夫婦のお宅へホームステイする機会にも恵まれ、とても貴重な体験となりました。仕事を早期退職し夫婦で残りの人生をゆったり楽しむというライフスタイルが、いかにもイギリスならではのものだと感じました。自分の家の庭(イングリッシュ・ガーデン)で野菜を育て、蜜蜂を飼い、ホームメイドの蜂蜜で朝食をとるという日常生活はとても素敵なものでした。

私は公園と美術館が好きなので、休日はほとんど必ず公園を散歩し美術館を訪れます。リージェンツ・パークやハイドパークなど広い公園の中を歩いてヴィクトリア&アルバート美術館、ワーナーズ・コレクションなどを訪れ美術鑑賞を楽しんでいます。ほとんどの美術館は無料で入館できるというのもロンドンの大きな魅力の一つです。これからもロンドンならではの暮らしを楽しみながら研究に励みたいと思います。

(2013年度BCJA奨学生, London School of Hygiene and Tropical Medicine, 公衆衛生政策)

2013年度BCJA 英国留学奨学金授与者からの近況報告

留学レポート

大原 裕子

2013年度BCJA奨学生として研究支援をして頂き、大変感謝申し上げます。私は、2013年10月より1年間ロンドン大学先端音楽研究所に特別研究員として、現代音楽創作研究のために在籍しました。ここでの研究は、同年7月に博士号を取得したブルネル大学での研究の継続になり、作品のコンセプトから発想したものを、実際、楽譜に起こしながら、新しい音や作曲法のテクニクを探求していくことでした。このレポートでは、在籍期間に創作した作品と、国内外の作品初演について書かせて頂きたいと思います。

[活動報告]

10月までの夏の期間、ニューヨークを拠点に活動している、Ensemble Mise-en からの委嘱作品「The Butterfly Effect I」を作曲しました。その作品は、10月11日にニューヨークのUniversity of Settlementで、デーヴィット・ブルーム指揮による同アンサンブルにより世界初演されました。

この作品は、エドワード・ローレンツにより発見されたカオス理論「バタフライ・エフェクト」を意味する、「初期のわずかな変化が思いがけない方向に発展し、大きな現象をもたらす。」をもとに考えられています。作品の中でも、初期の小さな現象が、徐々に誤差となり、音のずれや音域が増して経過していく作品です。また、ローレンツ・アトラクタに見られるように、音型も同じシェープを繰り返し使用し、それが徐々に変化したり、拡大されて描かれたりと、アトラクタのイメージに変化を与えながら創作をしていきました。作品は、同アンサンブルにより、Videmo でもプロモートされ、そのビデオはイギリスの Sound and Music/British Collection の自分のページにも使用しています。

今年1月にはロイヤル・ミュージック・アソシエイト学生会議があり、会議内の作曲家のためのワークショップで、2013年7月にスウェーデンのアンサンブル Curious Chamber Players よりフィンランドで世界初演された作品、The Wave Transformation」が、今度はイギリスのアンサンブル Birmingham Contemporary Music Group により演奏されました。

この作品は、波の波形や屈折していく移変をコンセプトに創られました。深層水から浅瀬に移動する際の、波の高さ、時間の長さのグラフをもとに作品を構成し、波の波形の変化するプロセスを、音に置き換え創作していきました。最初は、ヴァイオリンとチェロの弦楽器のみで始まり、微分音を用いての狭い音域で、浅い波間を表現していますが、それは、徐々に活力を増し、大きな波動へと変化していきます。

また、4月にはブルネル大学博士課程在学中に作曲した、ヴォーカルアンサンブルのための「蟬時雨 Semi-Sigure」がアメリカのエヴァンストンの Northwestern University 主催の New Music Conference 2014 で、Bienen Contemporary/Early Vocal Ensemble によりアメリカ初演されました。

[前日の Pick-Staiger Concert Hall でのリハーサル]

作品は、歌詞や言葉を歌うのではなく、多くの蟬が一斉に鳴き立てる声を、歌い手の息の音やフラッタータンクと呼ばれる巻き舌を使い、ノイズの効果を使い創作されています。初夏から秋にかけて耳にする、10種類の蟬の種類と鳴き方を調べ、季節が移り変わる様子を複数の蟬の声で表現しました。基本的なマテリアルに音程とリズムをあてながら、主に繰り返しや対比を考え、最後にはツクツクホーシのソロを聞かせる、コミカルな作品でもあります。世界初演は、イギリスの EXAUDI ヴォーカルアンサンブルにより2011年10月に Kings Place で行われました。

ベルギー在住のヴァイオリニスト百留敬雄氏からの委嘱作品、五弦ヴァイオリンの為の「Birefringence」が5月末に完成しました。そして、6月にスペインのパルマ島の、ME_MMIX

Festival で世界初演されました。通常ヴァイオリンの弦は四弦ですが、百留氏はヴァイオラのC線をもち合わせた五弦ヴァイオリンを弾くことができます。近年、ヨーロッパ在住の若い作曲家達が、彼の為に作品を書いたり、作品を委嘱されたりしています。事前にベルギーで行われた、彼のプライベートコンサートでも、この作品を取り上げて頂きました。

作品は、ヴァイオラのC線をさらに1オクターヴ下げて、チェロの音域を使っています。そのため、通常の五弦ヴァイオリンの調弦より、ナチュラル・ハーモニクスやサブ・ハーモニクスの幅が広がり、この効果は後半へ進むにつれて、増していきます。「Birefringence」は複屈折を意味し、光線が結晶などの物質を透過した際、2つの光線に分けられ、光学軸に対する偏光方向が異なります。この現象を、主にヴァイオリンのダブル・ストップによるグリッサンドの重音であらわし、其々の音が、異なる音域へ動きコードを奏で、音で現す遠近法を創るようになっています。作品は、電子音楽が伴うものですが、スペインの世界初演では、電子ヴァイオリン・ソロとアンプリファイドを使用しています。この作品は、2015年の2月6日に横浜美術館レクチャーホールで発表する予定です。



[ヴァイオリニストとのリハーサル]

また、今期の研究員修了までの間に、この「Birefringence」のコンセプトをもとにして、弦楽四重奏を作曲しました。ベースのリズムに、パイ音列を使用していたので、その数字をグルーピングしていったものを、他の楽器にずらして使うことで、より複雑な作品へと変化していきました。こちらは、同研究所が行う予定のワークショップに提出する予定です。

特別研究員修了後の2014年9月末に帰国致し、現在は、日本での活動場所を探しながら、主催のコンサートの準備をしております。今後、日本では現代音楽を広めていく活動を行ったり、海外のアンサンブルなどを招き活動の幅を広げていきたいと思っています。

ロンドン大学先端音楽研究所での研究をサポートして下さいましたBCJAに、あらためて感謝申し上げます。ここでの経験と

研究を励みに、これからも創作活動を続けて行きたいと思いをします。



(2013 年度 BCJA 奨学生, Institute of Musical Research, School of Advanced Study, University of London, 音楽(作曲・創作表現))

2013 年度 BCJA 英国留学奨学金授与者からの近況報告

「働き方」を再考する一年

吉益 美帆

3 年前、5 年間勤めた会社で刺激的な仕事をしながら、私はモヤモヤとしていました。やりがいのある仕事を任せられ同僚にも恵まれて給料もボーナスももらい、傍目からみたら幸せな日々を送っていたのに、毎朝同じオフィスに行き同じデスクに座り仕事をすることが苦痛でたまりませんでした。このままではいけないと変化を求めて、かねてから希望していた海外大学院進学をいざ実行に移そうとしました。すると今度は様々な壁が立ちはだかりました。何より大きかったのは会社を辞めなければいけない、という現実でした。また、外国の大学院に行き帰国した諸先輩から再就職の非情な厳しさも聞きました。しかし年齢を考えた時に行くなら今しかない、最後は半ば捨て身の覚悟で決めました。BCJA 奨学生に選んで頂いたことも大きな心の支えとなりました。この場をお借りして心より御礼申し上げます。

専攻は Creative and Cultural Entrepreneurship、直訳すると創造的文化的起業学。しかしそれでは中身がわからないので、聞かれた時はよく「芸術文化分野の事業開発」と説明していました。なぜこの学部を選んだかという、私には社会問題を演劇や芸術文化を通して解決していきたいという思いがあり、継続的な活動のためには公的支援に頼るだけでなく、自発的に資金を産み出し運用していく必要があると考えたからです。勉強を始める前は、何にでも応用できる事業開発方程式のようなものがあるのだろうと、なんとも楽観的かつ短絡的に考えていました。しかし、もちろんそのように簡

単ではなく、「自分がやりたいことは何なのか」「そのアイデアの独自性はどこにあるのか」「それを形にして継続して行くためにはどうすればよいのか」をひたすら考え、リサーチし、試作してはまた考える、果てしない戦いのようなプロセスでした。

授業ではアイデアを形にする論理法やリサーチ方法を学び、実践しました。自分の初期段階の思い込みがいかにも偏っていて、多くの場合間違っているかを、回を重ねるごとに痛感しました。また文化産業論や欧米文化政策、選択式の授業では障害者のための演劇を学び、多くのセミナーや講演会に参加できたことは、社会学的視点から起業の意味を考えるにあたり有益だったと感じています。学びは進化しており、伝統的な書物や理論から学ぶことだけが学問ではない、というゴールドスミス校のアプローチも私にとっては新しく嬉しい発見でした。

勉強の傍ら、3 つのプロジェクトを手がける機会に恵まれました。一つはクラスメイトとチームを組み実施したアートインスタレーション・Dream Catcher。「身近なところにビジネスパートナーや支援者はいる」ことの可視化をコンセプトに、学校内で展示を行いました。続いて昨年秋には、ドラマの手法を用いて日本語とその背景にある文化を学ぶワークショップを開催。擬音語・擬態語を使った内容が好評を得ました。このワークショップは、アズキ財団主催のもと今年 3 月にもロンドンのお年寄りを対象に実施することが決まっています。また、東京の高校生とロンドンの高齢者をインターネット上のビデオ通話を利用してつなぐ O.Cha という企画も昨年冬に立ち上げました。このプロジェクトは大学・大学院の学生を対象にした社会起業家賞を頂くことができ、先日第一弾のトライアルを行いました。初めての試みゆえに、多くの反対意見や私自身の不安もありましたが、実際に行ってみると好感触を得ることができ、実践してみることの大切さを改めて痛感しました。



写真 1: Dream Catcher

イギリス生活のなかで楽しかったのは、勉強やプロジェクトだけではありません。いま住んでいるグリニッジは自然が豊かでのんびりとしており、家のすぐ裏には広大な草原・ブラッ

クヒース、そして有名な天文台があるグリニッジ公園があります。ロンドンの多くのカフェや公共のスペースでは無料でインターネットに接続でき、電源が使える箇所もあります。また学校の図書館は24時間開いており、グループワークをする場所も多く設けられています。パソコンを気兼ねなく使い、一息つける場所が身近にあるという環境では、一箇所に縛られることなく仕事や勉強をすることができ、自由な発想を生み出す社会基盤を作ること大きな役割を果たしています。



写真2:ドラマ+日本語ワークショップ



写真3:O.Chaプロジェクト

これらの一年を経て、起業とは自らの働き方を確立することだと考えるようになりました。そしてそれは同時に、価値をどこに見出すかということでもあります。業務の対価としての賃金、それも一つの価値ですが、それだけではない。自分にとっての譲れない価値が、心躍る人生の意味がそこにあるかどうか。そして、自分が心豊かに生きていくための金銭感覚とどのようにしてバランスをとるのか。更には、快適な職場環境とは何か。それをいかに作り、必要に応じて刷新していくのか。

同時期に留学をしていた日本人の方々からは、元々在籍していた会社や組織に戻るか、就職活動で苦労されているという話を聞きます。職の流動性の促進は一部で声高に求められていますが、日本社会全体が変わるには時間がかかります。もしかしたら、私も以前の会社でそのまま働いていた

方が安定した豊かな生活を送っていたのかもしれませんが。しかし勇気を出して変化を決断し、脳にはまっていた箍を一度外してゆっくり考えることができた時間は、なににも変えがたいものだったと感謝しています。今後は春に帰国し、教育・文化をテーマにフリーで仕事をしながら、起業に向けて準備をしていく予定です。「なぜ日本なのか」と問われることがありますが、社会起業を目指すにあたり、やはり日本の中の問題を解決していきたいという強い思いがあるからです。また、日本ほど経済基盤が安定していて様々な可能性が潜んでいる国は、世界を見渡してもなかなかないと感じています。

お金はありません。仕事も今はありません。不安はありますが希望もあります。日本社会での働き方、そして生き方を自分なりに模索して答えを形作るとともに、3年前の私と同じ思いを抱えている人たちと共有していきたいと考えています。

(2013年度 BCJA 奨学生, Goldsmiths College, University of London, 文化事業企画)

2014年度 BCJA 会計決算報告書

(2013.11.1~2014. 10.31)

(一般の部)

収入の部

科 目	金 額
前年度繰越金	△275,164 円
年会費@2,000	264,000 円
合 計	△11,164 円

支出の部

科 目	金 額
ニューズレター印刷	38,880 円
発送費	86,214 円
封筒代	3,012 円
アルバイト	70,000 円
文具(コピー用紙等)	16,507 円
Web サイト更新費	20,370 円
総会写真	1,938 円
合 計	236,921 円

2014年10月31日現在の資産状況

次期繰越 (a)	△248,085 円
----------	------------

(BCJA 奨学基金の部)

収入の部

科 目	金 額
前年度繰越金	204,631 円
寄付金	1,117,000 円
合 計 (b)	1,321,631 円

支出の部

科 目	金 額
奨学金@150,000	750,000 円
振込手数料	16,542 円
小計 (c)	766,542 円

2014年10月31日現在の資産状況

次期繰越 (a+(b-c))	307,004 円
----------------	-----------

2015年度BCJA奨学基金趣意書

2015年1月31日

BCJA 会長 青柳昌宏

BCJA 奨学基金は、2000年よりBCJA会員の有志の皆さまからの寄付金を基盤として、英国留学生の支援活動を着実に進めてきております。昨年度は、6名(うち1名辞退)の留学希望者に対して、奨学金を授与することができました。

今年度も奨学生の募集を行いますので、奨学基金へのご寄付をお願い申し上げます。

記

一口 5,000円 二口以上でお願い申し上げます。同封の郵便振込用紙に、振込額、住所、氏名をご記入の上、下記口座宛にお近くの郵便局でお手続きいただければ幸いです。

ご寄附頂きました方々への領収書等の発行は特に致しておりませんが、必要であればご連絡、或いはご寄附の際に振込用紙にその旨、ご記載下さいますようお願い申し上げます。

尚、御礼状に関してはNewsletterにて代えさせていただきますことを御理解下さい。

口座記号番号:00180-0-426794

加入者名:BCJA 奨学基金

事務局 島津幸男

〒745-0004 山口県周南市毛利町 3-37-1-612

連絡先 Tel:090-8773-1024 Fax:0834-32-4030

e-mail: shimazu@herb.ocn.ne.jp

BCJAの銀行口座のお知らせ

金融機関名: ゆうちょ銀行

金融機関コード: 9900

店番: 019

店名: 0一九店(ゼロイチキョウ店)

科目: 当座

口座番号: 0426794

受取人名: BCJA ショウガクキキン

要注意!

総会参加費等、BCJA への振込時、ネットバンキングをご利用の会員の皆様には、次の点をご注意下さい。

振込先: ビーシージェイエー(BCJA)

2014年度BCJA奨学基金協賛者一覧

2014年10月現在

協賛者総数	94名	総額	1,117,000円
派遣者数	5名	奨学金総額	750,000円

協賛者氏名 (敬称略 順不同):

青柳昌宏	小倉美知子	橋都浩平	高田康成
秋山稚義	河合秀和	平岡公一	高柳和夫
阿部和彦	桂文子	太田隆英	前川功一
荒木喬	加藤久雄	古澤嘉生	益山新樹
有村祐純	滝沢英夫	細田衛士	三浦省五
安藤仁今	田口博國	金山弥平	水田洋
安原義仁	武内重二	茅野秀一	溝口節子
飯野正光	竹内百合子	川本敏	南方暁
池上忠弘	多田稔	河本直紀	武藤春光
池田修	田中晉	木村浩	村岡克紀
石井丈夫	田中典子	草間共樹	村田久美子
石杉役美子	田中治彦	齋藤友博	矢口宏
石渡淳一	田中弥寿雄	齋藤文良	山口勝巳
伊藤達郎	榊瑞希子	佐藤修二	山口泰夫
稲垣久雄	千葉恵	塩田洋	山下純宏
井上公正	塚原重雄	島津幸男	山下博
猪熊葉子	塚本泰	諏訪部仁	山田昭廣
梅川正美	中井晨	白鳥令	山田博志
大谷剛彦	中川成雄	菅井直乃	山中健
大野吉弘	長澤泰	杉浦和朗	横山昭
小鍛冶繁	中山修一	関谷透	横山俊夫
岡田博有	生駒夏美	高井清	米元純三
岡村定矩	難波光義	高石啓一	
小倉暢之	西田宏子	高須俊明	

BCJA ホームページについて

ホームページ担当

BCJAのホームページ <http://www.bcja.net/>では、過去のニ

ユーズレター閲覧、BCJA 英国留学奨学金、BCJA 活動状況、メンバー向け案内などがご覧になれます。幅広く有益な情報を提供できるサイトにするため、どうぞ皆さまからのご意見、ご希望をお寄せ下さい。

ishiikayoko@hotmail.com まで

Google グループ[bcja]のご利用案内

Google グループ担当

BCJA 会員の情報交換、情報伝達などに活用していただくために、Google グループの中に BCJA 会員専用グループとして、[bcja]グループを新規に設定いたしました。これまでの Yahoo グループのメンバーの方は、登録内容を移行しております。登録を希望される方は、Google へ登録後に下記の URL にアクセスして下さい。

<https://groups.google.com/forum/?hl=ja#!forum/bcja-member>

または、masa_aoyagi5@yahoo.co.jp までメールでご連絡をお願いいたします。

[編集後記]

青柳会長より後を受けて、27 号より編集を担当させていただいております。今年も出版が大幅に遅くなりまして大変申し訳ございません。皆様のおかげでなんとか出版に漕ぎ着けたこと、心より感謝申し上げます。

本レターへの投稿を幅広く募集しております。皆様の留学体験談、研究・事業活動のご紹介、英国との交流事例、最新の英国事情など、英国と日本の交流に関する内容について、よろしくご投稿をお願いいたします。既に原稿をお送りいただき、掲載されました方々にも、続報の投稿をぜひよろしくお願いいたします。また、特集テーマ、原稿依頼先の案、紙面構成、編集方針などのご意見も積極的に寄せいただければ幸いです。

なお、本レター発送については、会計担当の島津様にご協力いただきました。この場を借りて、心より感謝いたします。

(石井加代子、慶應義塾大学、London School of Economics, 2003-2004)